

ある研究会で

——周郷先生のお話——

「先生、おすわり下さい」という司会者の言葉に、「いや、皆の顔がみえないから、ぼくは立っています。それに、立っていないと人間、どこかゆるんじやうんだな」と、すわっている私どもが腰をうかしそうになるのを、笑って見回してから、お話が始まりました。

「ぼくはきょう、とても興奮してゐるんです」と開口一番、新聞の切抜きを片手に、ジョゼフ・ニードム (Joseph Needham) の「中国の胎動」の稿について話された。いつでも先生のお話をうかがうたびに思うのだが、先生のお話は耳が聞くだけでなく、眼も聞いているような気がしてくる。中国の話をうかがっていると、大きな中国大陸と、小さな島国の日本が書かれ、肩の方に「アジア大陸」とみだしのついたなつかしい地図帳が目につかんでくる。

お話の方も、うっかりしていると思えるほど、次々と移っていく。このニードムがイギリスのテイヤール・ド・シャルダン協会の会長 (ケンブリッジ大教授) であることから、まず外国

人、殊にイギリスの学者の幅の広さをとり上げられた。日本のように教育学、心理学というようにせまい専門的知識だけを身につけていない。ニードム自身も生化学の教授であり、中国に関する研究、人類学の研究にも通じていると話された。そして現在の中国を非常に正しく見ており、日本がいかに中国に対してあやまった見かたをして、あやまった道を歩いているかを指摘している。

「ぼくは、幼稚園の園長なんかをして、幼児教育などとせまいことを考えている時ではない、と思ったんです」とおだやかでないことをおっしゃる。せつかく全国の保育者たちが先生に注目しているのに……。

「でも、今ぼくがイギリスへいってもどうなることでもないよね」というわけで、以前から要請されていらしたイギリスのテイヤール・ド・シャルダン協会の会員になるべく、銀行で送金をずませてきた、とのお話に一同ほっとした。

次に、当然お話はテイヤール・ド・シャルダンのことになり、この偉大な人類学者についてかいつまんで話され、またまた思わぬ人物が登場した。シャルダンが北京にいたころ、シャルダンと親しくして、のちに家政大学の教授となられた遠藤隆次教授のことである。教授が北京にシャルダンをたずねられた時のこと、北京飯店 (最近、藤山代表らが泊ったところ) にいったところ、最初へやがないと断わられたが、シャルダンと知り合いであると

いうと一番上等なへやに案内された。それほど中国人はシャルダンを尊敬し、シャルダンも中国人を理解していたのである。

先生がその教授を大学にたずねられ、お互いにシャルダンのことなど、意気投合して話し合われた。そしてうす暗い廊下を帰られる先生のとを追ってこられたその老教授が「あなたの停年はいつか、停年になったらここへこないか」といわれた。「なんと無邪気な人でしょう。七十いくつですよ」と先生自身もまた、実に若々しい面持でいわれた。

外国の学者の幅の広さというところから、ノーベル文学賞を受けたチャーチル、詩人である毛沢東、それに反して口を開けば「高度経済成長」としかいえない佐藤首相のことにまでいった。昨年、オメツプの記念講演をしたフランスのガストン・ミアラレ(G. Maillard)は冒頭にユーゴーの詩を引用した。そしてその著書「現代教育入門」の中で次のようにいっている、「教育は、人類始まって以来人類最大の関心事であるのに、皆が本気で考えていないということが現代の危機である」また「教育は知識ですべきではなく、もっと人間的な行動である。したがって教育は芸術である」と。

人間の中には遺伝とだけ簡単にいえない、遠い昔からなにか細い糸でつながれたものがあって、今、自分がいっていること、していることは、本当は自分がしているのではなく、そのなにかが

させている。これがフロイドなどのいった感情情緒、意志といったもので、このほかにピアジェのいう知性があるわけである。前者は芸術と労働の中で教育され、それに知的発達のための教育が加わり、三者一体、全面発達の教育が理想なのである。

ドイツのシュタイナーという人は人間を植物にたとえておもしろいことをいっている。植物の脳は地面の下にある根である。そして植物は、手足である枝、葉に労働をさせてどンドン育っている。人間もこの姿を学ぶべきである。

しかしこれらのお話は、実は本題ではなく、きょうの本題は、とメモに書かれたフランス語を先生は読まれた。ちょっとてれくさそうに……。まだ先生も私も若く、学生の前ではほとんど顔を上げずに講義をされたあのころの先生を見るようだった。私にはエッセイというところぐらいしかわからなかったが、「幼児教育に關する、思いついたまま」というような意味だと訳して下さった。

そしてますますお話は佳境に入り、「日本人は間食が多すぎる」といわれた直後に、皆の間に飴をのせたお盆がまわると「間食もエレガントにやればいいですよ」と外国婦人が、それこそエレガントに、お魚を頭も尾も一つも残さずに食べているのを見た時の驚きを話して下さったり、予定の時間をすぎてもお話は続き、そのあと今度は私どもの方から、いいたいことをいわせていただいたり、本当に楽しいひとときだった。(みどり会研究会 赤間記)